



絵本は子育ての強い味方

「自分で考える力」と「夢」を持った子どもに育てたい。

そんな子育ての味方が絵本です。

多くの本を読んで育つと、「文章理解力」「自己表現力」「思考力」

「集中力」「表現力」「共感力」などが培われると言われています。

お金もかからない家庭教育である「読み聞かせ」。0歳から何歳

まででもOKです。読む本や読み聞かせのコツなどに困ったときは、

ぜひ図書館をご活用ください。



『さっちゃんのまほうのて』

たばたせいいち、先天性四肢障害児父母の会、のべあきこ、しざわきよ共同制作 偕成社

先天性四肢欠損という障害を負って生まれたさっちゃん。傷つきながらも右手の指がないという障害を受け入れ、力強く歩き始めます。

小学生にすすめられるこの絵本を、3歳のみどりちゃんが読み聞かせをしてもらいました。そのとき…。

3歳のみどりちゃんという女の子がいました。

そのお宅はずっと読み聞かせをしておられ、たくさんのお本があります。3歳の子どものためにもこういう本も用意していたそうです。

みどりちゃんがこの本を持ってきたのでちょっと早いかな、とお母さんは思われたそうですけれど読みはじめました。

そうしましたら、じっと両手を握り締めて聴いていたそうです。お母さんは、ああ聴けるんだな、と思いながら最後まで読みました。質問とか感想とかは、聞かなくてくださいとお話していますので、そのままみどりちゃんはまた自分の部屋に戻っていったそうです。

夕方、お父さんがお仕事から帰ってきました。みどりちゃんは玄関まで走って行って

「お父さん！ さっちゃんだってお母さんになれるんだよ。指がなくてもお母さんになれるんだよ」

とお父さんに必死の表情で訴えたのだそうです。

お父さんも、もちろん読み聞かせをしていますので、この本の内容を知っていました。だから、みどりちゃんの言っていることがすぐピンとききます。

それも大事なことなのです。子どもが何か言っていた

ら、そのことがすぐに理解できる。応えてあげられるということはとても大事なことなのです。そしてお父さんが「なれるとも、お母さんになれるとも。そうだよ」と答えてあげたら、みどりちゃんは安心して、また自分の遊びの部屋に戻っていったそうなのです。

今、子どもたちは想像力がないとか、人の気持ちが分からないとかやさしくないとか、いろんなことをいわれています。でも、たった3歳のみどりちゃんですえ、さっちゃんの悔しい気持ち、悲しい気持ち、つらい気持ちというのを理解することができるのです。

絵本を読んであげる。そして読書、識字に入る。

本を読むということは他人の痛みやつらさや悲しみを理解する行為なのです。人間が人間であろうとする営為（いとなみ）にほかならないわけです。

だからこそ周りの大人が良き導き手となって、子どもが読書から離れないように見守ってあげてほしいなと思うのです。心は育てなければ育ちません。放っておいたらやさしさも何もかも、決して育ててはいけません。

心を育ててあげてほしいなと思うのです。

*『森ゆり子講演録 絵本を読んであげましょう』（著者：森ゆり子 発行所：NPO法人「絵本で子育て」センター）より